

## 中央大学国際経営学部 企業訪問報告書

調査テーマ	株式会社 印傳屋上原勇七 革工芸品の伝承とあり方
調査日	2021年10月28日(木)
調査先	株式会社 印傳屋上原勇七 出澤 忠利 様 早川 弘美 様
担当教員身分・氏名	教授 申淑子
授業科目/学部企画名	訪問調査(「企業訪問」)
参加学生数(学年)	2年生4人、1年生13人(計17人)
調査趣旨・目的	工場に訪問し、印傳屋が誇る革工芸技法についてご説明を聞き、印傳博物館の見学や質疑応答を行う。
調査結果	<p>まず初めに印伝製品の製造工程の工場にご案内いただき、実際に燻と漆の技法を見学しながら、社員の方から鹿革の特徴や、燻、漆、更紗の3つの柄付け技法の特色やそれらの販売方法などについての説明をお聞きした。続いて取締役出澤様より会社概要をご説明いただいた後、質疑応答を行った。出澤様による説明では、甲州印伝および会社の歴史に始まり、印伝商品の特色である模様が持つ意味や、製品の強みなどについてご紹介がなされた。1582年から約400年続く企業ということで、時代ごとの鹿革のあり方についての説明を受けたことで、人々の暮らしと鹿革がどのような関係性であったかを知ることができた。その後の質疑応答の時間では、学生から「なぜ、進出先としてニューヨークを選んだのか」、「GUCCI やティファニーとコラボする際にはどのようにデザインを決めているのか」、「洗練されたサイトやパンフレットはどのように制作しているのか」、「海外展開はどのように行っているのか」、「広告は出しているのか」などの質問があり、大手ハイブランドとのコラボ商品やマーケティング事情、印傳屋のこだわりや強みなど多岐にわたる話題についてご回答いただいた。最後に印傳屋博物館を見学した。そこには社員の方々が収集したという印傳屋がこれまでに作ってきた商品、貴社の歴史をたどっていくうえで欠かせない商品が展示されていた。いくら伝統がある企業と言ってもお客様には信じてもらえず、実際に存在する書物で印傳屋が本当に古くから商いを行っていた背景を証明する、ものづくりをしているからにはもので勝負する、とものづくりに対して熱い想いをもって話す出澤様のお話は学生の関心を刺激した。印傳屋博物館見学の後、本店の見学もしたが、そこでは博物館とは異なる現在の流</p>

行に合わせた商品を見ることができた。

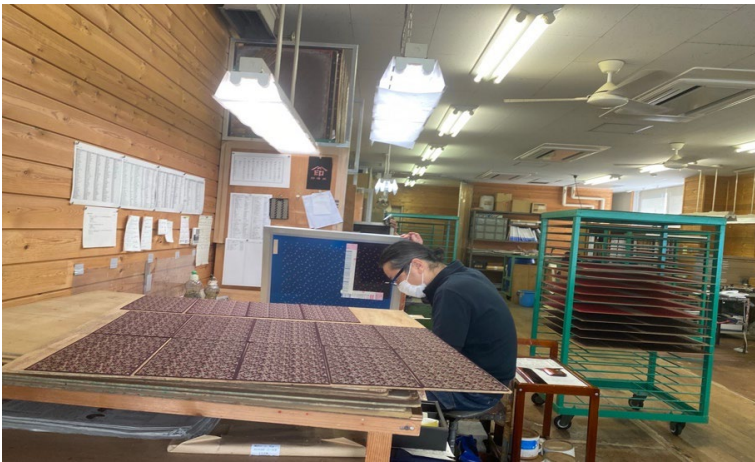
学生の事後レポートからは、伝統の技法を受け継ぎながらも時代とともに常に新しい美やニーズを取り入れ進化し続けている印傳屋での企業訪問を通して伝統とビジネスという観点は非常に興味深いと感じた、今後も注目していきたいとの報告も受けており、今回の訪問が学生の大きな刺激になっていることが把握された。

※調査時の写真

技法についてのお話を聞く学生たち



漆付けをしている職人



真剣にメモをとる学生たち



印傳のオリジナルブランドの商品たち



最後は集合写真を撮って締めくくりました。

